

小諸のおいしい桃。

ぜひ栽培にも携わる方が増えると嬉しいですね。



中村果樹園 / 長野県果樹研究会 佐久支部長
中村 眞一さん

定年退職後に父の畑を引き継ぎ本格的に農業を始めた中村さん。桃のほかに、プルーン、りんご、梨、キウイフルーツなども栽培しています。

イメージがない方もいらっしゃると思いますが、昔から小諸では栽培が盛んです。気象条件・地形が整っているほか、三岡地区の土質は浅間山麓の火山灰を含み水はけが良いため、桃栽培に適しています。歴史のある小諸の桃のことを市民の方に知っていただき、知名度も上がると嬉しく思います。個人的には「浅間水蜜桃※」という名称が気に入っています。

※三岡地区を中心に栽培された、甘みの強い高品質な桃の総称
食べた方の「おいしい」の音が一番の



中村さんが好きな食べ方
自家製の桃ジャム

やりがいになってるので、農業に辛さを感じることはあまりありません。全国の友だちに毎年桃を送っていて「中村さんの桃はおいしいね」と返事をもらえると嬉しいですね。皆さんにおいしく食べてもらうためにも、効率の良い作業・植樹を進めているほか、最近は摘蕾※にも力を入れています。

※開花・結実による樹の養分消費を防ぐため不要な蕾を落とす作業
今後について、桃に限った話ではないのですが、後継者の問題があるので、一緒に栽培に携わっていただける方が増えると嬉しいです。

小諸の桃は果実が大振りで食感が良く、ジュースで甘みを楽しめます。ぜひ色々な食べ方を試してみてくださいませ。

農家さんに聞く

小諸の桃のお話

関東地方出身の城田さんは今年で移住9年目、就農7年目。移住セミナーなどを介して小諸市を選び、現在は三岡地区で桃とりんご栽培を行っています。

前職が寺社専門の左官・造園業で、「樹木に対して見識があった点」「自分が桃好きだった点」「生産・お客さんとの対応・流通という、一環した流れで個人事業主として仕事が出来た点」が桃農家を選んだきっかけです。特に「お客さんに直接桃を渡して、ダイレクトな声を聞いた」という気持ちは農業を始めた当初から今でも強く持っていて、「おいしい」という感想を直接いただく、一番喜びを感じます。確かに農業は自然や気候に左右されるため大変なことも多いですが、やりがいも多く、「樹木が健康であること」「畑を綺麗に大切にすること」などを意識して桃栽培を行っています。



取材時には摘果（果実を間引き、栄養を行き渡らせ、大きく甘い高品質なものに育てる）作業が行われていました。

城田農園 城田 圭介さん

近年小諸市は桃のブランド化が進んでいます。しかし知名度はまだ低いと感じています。せっかくおいしい桃が手に入るのに、市民の方にもぜひ手に取っていただきたいです。小諸産の桃を使った飲食店がさらに増えてくると、より身近に感じられるので嬉しいですね。また個人的には「農業を体験できる制度」や「農業×他業種・他分野との連携」も増えるのが新規就農や移住、まちの賑わいにもつながると信じています。

小諸の桃は甘くておいしいだけではなく、人や地域をつなぎ、まちを元気にする力を間違いなく持っています。これからも「小諸の夏を桃色に染めたい」という気持ちを持ちながら、桃づくりを進めていきます。ぜひ小諸の桃をたくさん食べていただき、生産者・消費者の垣根を超えて市内全体で小諸市が盛り上がるのを嬉しく思います。



城田農園 城田 圭介さん



食べた方からの「おいしい」の声に「喜びを感じます。」



城田さんが好きな食べ方
牛乳パン(マスカルポーネチーズ、砕いたナッツ、桃入り)



二代目 塩川伊一郎 肖像画

小諸の桃栽培の歴史

小諸の桃栽培の歴史は、明治29年(1896年)頃に始まったと言われています。当時の小諸では米作や雑穀栽培、養蚕が主な産業でしたが、冷害の影響を受けやすいという問題があり、安定した農業経営を目指して新たな作物の導入が模索されていました。そこで三岡村の塩川伊一郎らの農家が、小諸義塾の校長であった木村熊二に指導を仰ぎ、三岡地区の気候や土壌が桃栽培に適していたことから、栽培が広まっていっていったとされています。

伊一郎らが中心となり、当時の人々は栽培技術の習得に取り組みました。その結果徐々に販路を広げていき、小諸の桃は次第に評価を高めつつ「浅間水蜜桃」の名で知られるようになりました。また、桃は日持ちがしない果物であるため、当時は缶詰やジャムとして加工・販売も多くなされていました。

※その後、いちごジャムの加工も盛んになっていきます。1910年4月20日に塩川伊一郎がいちごジャムを皇室に献上したとの記録があり、「日本のジャム産業の礎」となると考えられています。そして日本のジャム産業の発展に大きく貢献したこの日を「ジャムの日」と決めました。

小諸が桃の産地として今日まで発展した背景には、自然条件の良さや先人たちの努力があります。標高700メートル前後の高原地帯に位置し、昼夜の寒暖差が大きい小諸は晴天率が高いため、糖度が高い豊かな実が育ちます。この恵まれた環境と先人たちの尽力こそが、高品質な桃の礎です。現在でも「あかつき」「なつっこ」「川中島白桃」など様々な品種が栽培され、小諸を代表する特産品となっています。



【写真】上：缶詰用の桃の種抜きを行う様子。下：当時の桃の缶詰のラベル。(小諸市所蔵)

